

都市近郊里山地域周辺の観光ポテンシャルを把握するための 分析手法の検討

——平塚北西部ゆるぎ地区を取り巻く観光状況の診断——

田中 伸彦^{*1}・本田 量久^{*1}・ショウ テイ^{*2}・二重作 昌満^{*2}

Tourism Potential Analysis Around the 'Satoyama' Countryside Destination in
Tokyo Metropolitan Suburbs: A Case Study of 'Yurugi District' in Northwestern
Hiratsuka City, Kanagawa Prefecture, Japan

Nobuhiko TANAKA, Kazuhisa HONDA, Ting SHAO and Masamitsu FUTAESAKU

1. はじめに

今後人口の減少が想定される日本の都市近郊の里山地域においては、「住んでよし・訪れてよし」のまちづくり、つまり、如何に定住人口の減少を抑えて、交流人口を増やすかというまちづくりの推進が大きな課題となっている¹⁾。

東海大学湘南キャンパスが位置する平塚市の北西部地域の里山周辺においても、例外なく高齢化が進み、近い将来人口が減少に転ずることが想定されている。その北西部に位置する「ゆるぎ地区」では、現在、里山地域のまちづくりに向けて全国的にも希な「産官学民」4者協定²⁾によるまちづくりが推進されてきた^[1]。ゆるぎ地区では、地域振興の柱として、里山の農地・林地を第一次産業として活用する農学的側面によるまちづくりに加えて、地元の観光資源や散策路、眺望などを活用した観光的側面を取り入れたまちづくりを本格的に行うための模索を続けている。そして、年に数回、公開ワークショップを開催するなどして、地域の一般市民らとともに、地域観光資源の発掘や里山の再生、地元の素材を使った食材の開発などを行っている。筆者らは「学」の立場で、2010年度からこの取り組みに加わった。そして、2013年度から2015年度にかけては、「地（知）の拠点整備事業（To-Collabo プロジェクト）」を活用して、ゆるぎ地区における観光まちづくりの方向性について、定性的・定量的に調査・分析してきた。

ゆるぎ地区に限らず、21世紀に入り、日本では観光立国による活性化施策が重視されるようになった。そして、地方創生のためには既存の有名観光地に旅行者を誘客するだけでなく、里山を観光目的地として整備していくことに期待が高まってきた。その理由は、国土の面積比

*1 東海大学観光学部

*2 東海大学文学研究科

投稿日2017年9月30日 受理日2017年11月10日

において、里地里山の面積は約4割を占めているため、これだけ広大な空間を観光目的地として利用しない手立てはないと考えられているからである。

しかし、近年は里山地域の多くで、人口が減少するとともに高齢化や後継者不足が発生し、放置林や耕作放棄地が増加して問題になっている。このような里山を再生し、観光客が訪れる里山へと整備し、その里山から産出される農林水産資源を効果的に活用することは非常に重要である。これまでに、里山を含む農山村の観光レクリエーション機能や野外教育機能の地域ポテンシャルを流域という広域スケールで定量的かつ地理的に解明するための研究が体系的に行われてきた^{[2]~[16]}。しかしながら、それらの先行研究では、ある特定の地区を対象にして多面的な観光情報を組み合わせて調査し、周辺地域の観光ポテンシャルの実態を踏まえて、特定地区の観光の将来計画を提言するための方法を考察した事例は見ることができなかった。

以上の状況を鑑みて、本論では、都市近郊里山地域の地方創生ポテンシャルを適正に判定し、将来の観光像の提言を行うための一連の研究を推進した。

2. 目的・対象・方法

(1) 目的

本論は、既存の有名観光スポットを持たない都市近郊の里山地域において観光推進を行う前提として、その地域を取り巻く観光実態を地理的、定量的に分析する手法の提示を行うことを目的としている。現在、日本各地の里山地域で観光振興の取り組みは行われているものの、その多くが自己の管理する地域内における観光資源の発掘や、地域内の観光施設の整備に留まっていることが少なくない。

しかしながら、一般的に来訪者の多くは、それら管理者が来訪を期待している里山の範囲内だけを旅程のデスティネーションとして認識しているわけではなく、都道府県内、隣接市町村などの観光地を一体的に認識する。つまり、里山は多くあるデスティネーションの選択肢の1つとして認識されるに過ぎないことが一般的である。したがって、管理者は、自己の管理する里山域内にある観光ポテンシャルの把握に留まらず、周囲の観光地の特徴や季節性、誘客トレンドなどを見据えて対象里山のブランド化を図る必要があると考えられる。

本論では、上記の様な目的のもと、公開されている既存データを活用して分析可能な手法を提示するための一連の考察を行った。

(2) 対象

本論の対象地は、既に本文でも触れているとおり、神奈川県平塚市の北西部に広がる里山地域の中にあるゆるぎ地区である（図1の星印）。同地区は都心からほぼ50 kmに位置し、東京への通勤圏にあるにもかかわらず、良好な里山地帯が残されている。ゆるぎ地区内には、上吉沢^{さわ}、中吉沢^{なかきさわ}、下吉沢^{しもきさわ}の3つの旧集落と、めぐみが丘ニュータウンの計4つの自治会があり、その背後に森林（旧薪炭林とスギ林）や、畑地を中心とした農地が広がる約491 haの地域である。域内の多くは農地や森林が占めており、農地は畑作農業や酪農などで活用されている一方で、里山林は林業等の衰退により、現在はほとんど産業活用されていない。

日本全国の農村部と同様に、ゆるぎ地区においても農業従事者の減少、高齢化、荒廃山林の増加などの里山環境悪化という地域問題を抱えている。そして、首都圏に位置するといえども、近い将来は少子化等に伴う人口減少が懸念されている。

本論ではこのゆるぎ地区を調査対象の核心とし、観光状況を分析する範囲としては、同地区を取り巻く神奈川県全域ないしは平塚市及びその隣接市町とした。



図1 神奈川県平塚市およびゆるぎ地区の位置図（図中の星印：★）

（3）方法

本研究では、周囲の観光地の特徴や季節性、誘客トレンドなどを把握するために、既存データを用いた分析を行った。

分析手法は大きく3つに分けることができる。1つ目は、観光ガイドブックを用いたデステイネーション性の分析である。具体的には、日本の観光情報誌として定評のある『るるぶ（JTBパブリッシング）』誌を用いた分析を行った。『るるぶ』誌の情報を一括してとりまとめているホームページ「るるぶ.com HP」^[17]を閲覧し、2015年時点で日本全国で発売されていた『るるぶ』誌のうち、平塚市ゆるぎ地区が存在する神奈川県を対象にしたものがどれだけあるのかを集計し、マップ化する分析を行った。さらに神奈川県を対象にした『るるぶ』誌の内容を確認し、神奈川県内のどの市町村が観光デステイネーションとして紹介されているのかをとりまとめ、考察を行った。

2つ目は、『平成25年神奈川県入込観光客調査』^[18]を用いて、神奈川県内の観光のシーズンナリティに関する分析を行った。具体的には、同調査から神奈川県内の各市町村において、最も観光客が訪れている月を抽出し、神奈川県内の観光シーズンナリティに統一性があるのか否かを検証し、考察を行った。

3つ目は、平塚市及びその隣接市町³⁾、計9市町を対象とした「三次メッシュを用いた5×5フィルタリング解析法」^{[2][3][5]}を用いた分析である。具体的には、日本国内の10万件以上の情報を持つ観光検索データベースサイト「全国観るナビ（旧：全国旅そうだん）（公益社団法人日本観光振興協会）」^[19]をデータとし、上述の解析法を用いて、平塚市ゆるぎ地区を取り巻く9市町の既存観光資源／施設の集中状況の実態と時系列変化を分析し、考察を行った。

(1) 観光ガイドブックを用いたデステイネーション性の分析

図2を見ると、日本全国47都道府県のうち都道府県名が冠されていない所は、神奈川県と三重県、島根県の3県だけであることが明らかとなった。ただし、そのうちの三重県は「伊勢志摩」、島根県は「出雲」と県名の代わりに旧国名が使用されていることが確認できた。一方で、神奈川県には旧国名である「相模」「武蔵」を冠した『るるぶ』誌も確認できなかった。この状況が、『るるぶ』誌特有の現象ではないかを確認する目的で、念のため同様の地域情報紙である『まっぷる（昭文社）』の市販誌も調査したが、やはり神奈川という県名を冠したものは確認できなかった。以上のことから、観光デスティネーションとしての観点からは、神奈川県は総体的に統一認識されていない可能性が高いことが示された。

(着色された都道府県：神奈川，三重，島根以外)

(出典: るるぶ.com HP より <https://www.rurubu.com/> 2015 年 11 月 1 日閲覧)

表1を見ると、都道府県別『るるぶ』誌対象都道府県ランキングでは、神奈川県は東京都に続いて第2位の10誌⁶⁾に掲載されていることが明らかになった。神奈川県は、上位にある北海道や長野県などと比較すると面積が小さく、また東京都や鹿児島県の様に島嶼部など地理的に隔絶された独立観光地が散在しているわけでもないことを考えると、この件数は非常に多いということが考えられた。要するに、神奈川県には県名を冠した統一的な地域情報誌が公刊され

表1 『るるぶ』地域別情報誌（市販品）の都道府県別掲載頻度上位10位

	都道府県名	対象誌数
1	東京都	12
2	神奈川県	10
3	長野県	9
4	大阪府	8
5	静岡県	7
	兵庫県	7
	沖縄県	7
8	北海道	6
	京都府	6
10	鹿児島県	5

（出典：るるぶ.com HP より <https://www.rurubu.com/> 2015年11月1日閲覧）

ていないという特徴を持つ一方で、神奈川県内の特定地域を掲載する情報誌は多数あるという他県には見られない特徴が確認できた。

この点を掘り下げて分析するために、続いて、上記10誌の内容を確認し、10誌の中のいずれかで観光デスティネーションの対象とされている市町村を抽出し、図3としてとりまとめた。

図3を概観すると、神奈川県内の観光デスティネーションの対象となっている市町村は、大きく「横浜・横須賀地域」、「丹沢・大山地域」、「箱根地域」に大別できることが示された。また、本調査の対象地であるゆるぎ地区が存在する平塚市は観光デスティネーションの対象として掲載されていないことが明らかになった。加えて、神奈川県内には平塚市を中心に北方向、西方向に観光デスティネーションの対象とはなっていない地域が連続して続いている実態が明らかとなった。



図3 神奈川県を対象とした『るるぶ』10誌で観光デスティネーションの対象とされている市町村（色塗り部分）

(2) 神奈川県内の観光のシーズナリティに関する分析

図4は、県内の市町村別・月別の、観光客の最高入り込み月を示したものである。平塚市の最高入り込み月については黒地に斜体の白抜き文字で示したが、「湘南ひらつか七夕祭り」が開催される7月となっていた。しかしながら、最高入り込み月が7月であるのは、平塚市を含めて県内には4箇所に残っていることも明らかとなった。

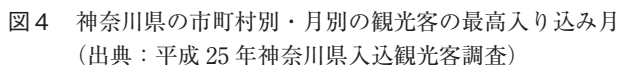


表2 神奈川県各市町村別・月別の観光客の最高入り込み月

最高入り込み月	市町村箇所数
1月	4
2月	1
3月	2
4月	0
5月	2
6月	1
7月	4
8月	15
9月	1
10月	0
11月	1
12月	2

(出典：平成 25 年神奈川県入込観光客調査)

神奈川県全体の最高入り込み月の分布（表2）を見ても、夏休み期間中の8月に最高を記録する市町村が15箇所と突出して多いものの、4月と10月を除く10ヶ月に各市町村の最高入り込み月が分散していることが明らかとなった。この事実を考察すると、神奈川県では、例えば避暑地やウインターリゾートなどの、季節を伴った統一デスティネーションイメージを、県全体では持ちにくいということが明らかとなった。

この事実からは、神奈川県は、デスティネーションの分散状況だけではなく、観光のシーズナリティの側面からも統一イメージをとりにくく、特に平塚の様な既存観光誌の情報からも埋もれがちな場所は、シーズナリティによる県内他地域への来訪者がついでに立ち寄るトリクルダウン的な観光行動の恩恵にあずかるということも難しい状況にあることが指摘できた。

（3）「三次メッシュを用いた5×5フィルタリング解析法」を用いた分析

以上、神奈川県全体では、観光デスティネーションの統一イメージがつくりにくい神奈川県において、その中でも有力なデスティネーションとはいいがたい平塚市ゆるぎ地区の観光振興を行うための更なる分析を行った。具体的には、平塚市およびその隣接9市町（計5市4町：図5）の状況を加味し、「三次メッシュを用いた5×5フィルタリング解析法」による観光資源／施設の分布状況の分析を行った。

まず、現状（2013年のデータを使用）の観光ポテンシャル地の集中状況の分析結果では、5市4町内には、計9箇所の観光ポテンシャルの高いピークメッシュが観測された（図6の太枠で囲んだメッシュ）。ちなみに、平塚市のゆるぎ地区は、湘南平周辺地域と弘法山周辺地域、伊勢原駅周辺地域のピークに囲まれたポテンシャルの谷に位置することが示された。

また、この様な状況に近年変動があったか否かを確かめるために、「全国観るなび」のデータを遡ることができた1998年時点⁷⁾における観光資源・施設の集中地のポテンシャルも分析した（図7）。

図7によると、1998年時点でも、計9箇所の観光ポテンシャルの高い集中地が観測されていた。その内8箇所は2013年時点と同じ集中地であった。一方、1998年当時には茅ヶ崎市に「サザンビーチ周辺地域」を核としたピークを見ることができた。このピークが2013年に見られなくなった理由は、サザンビーチ周辺の資源 / 施設性が劣化したというよりは、湘南平周辺地域からサザンビーチ周辺地域にかけての観光資源 / 施設のポテンシャル、特に平塚駅周辺のポテンシャルが底上げされることにより、両者が一体化した結果の統合的減少であると判断できた。

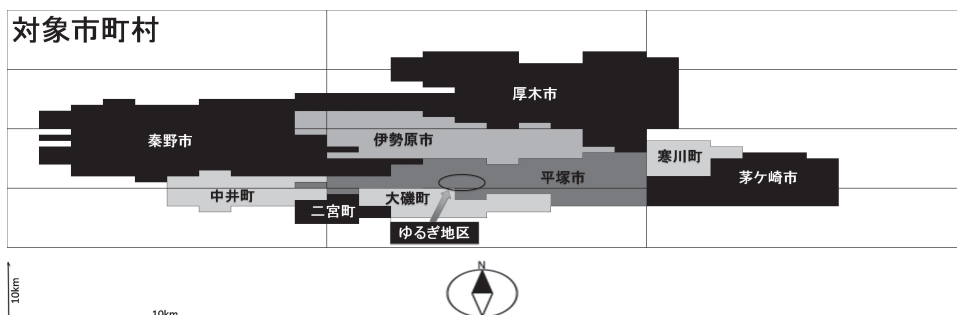


図5 平塚市周辺の9市町およびゆるぎ地区の位置関係

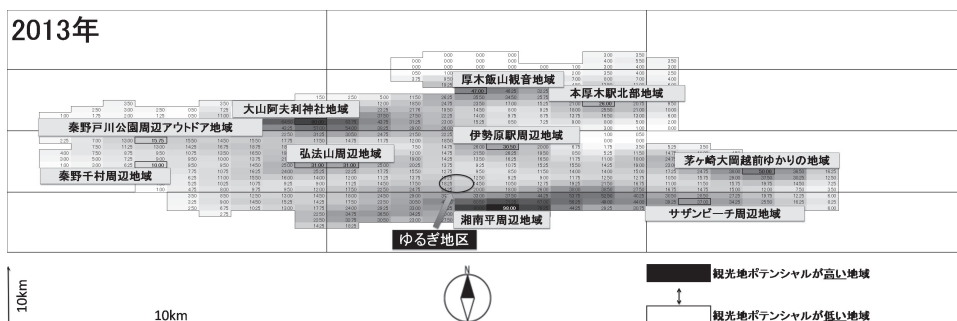


図6 平塚市および隣接市町の観光資源・施設の集中地（2013年）
（「全国観るなび」DBに掲載された観光資源・施設情報をもとに筆者らが解析）

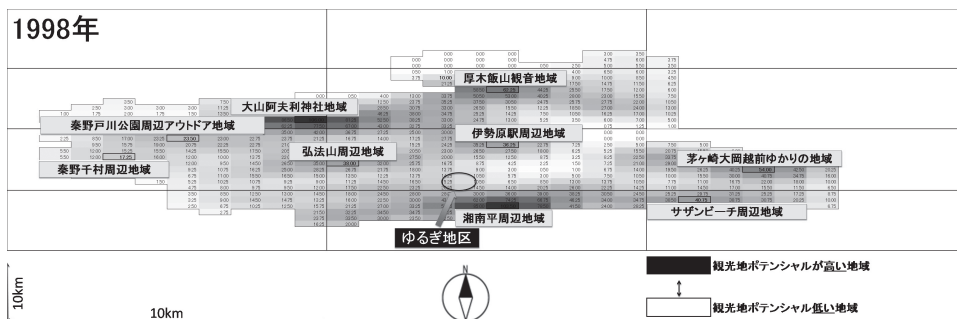


図7 平塚市および隣接市町の観光資源・施設の集中地（1998年）
（「全国観光情報データベース」をもとに筆者らが解析）

そして、2013年には本厚木北部地域に新たなピークを見いだすことができるようになった。その理由は「ほうさいの丘公園」などの整備が進み、新たな観光デスティネーションとしてのポテンシャルが高まったことが理由として挙げられる。

引き続き15年間のポテンシャル推移を詳細に考察するために、図6、図7の解析結果を用いて、1998年から2013年にかけての15年間における観光ポテンシャル集中地の得点変化を差分にて表したものが図8である。

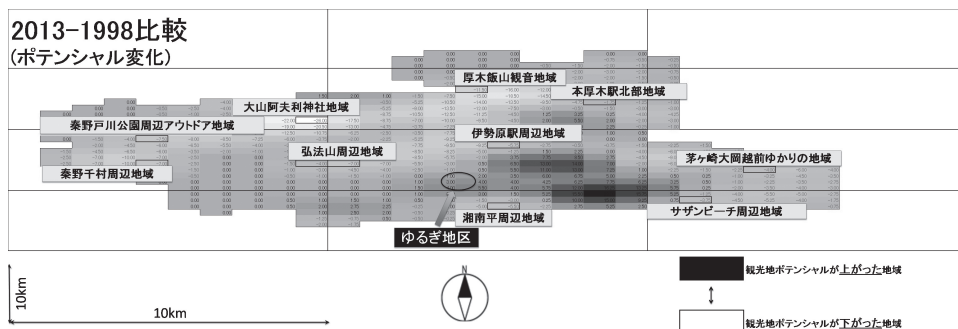


図8 1998年から2013年にかけての15年間における観光ポテンシャル変化の差分
(「全国観るなび」「全国観光情報データベース」をもとに筆者らが解析)

図8を見ると、上述の本厚木北部地域のポテンシャルが上昇して新たなピークとなったことに加えて、平塚市の北・中央部や平塚市の南部、大磯から二宮町にかけてのポテンシャルが上昇していることが読み解けた。平塚市の北・中央部は、従来農業を中心とした地域であるが、そこに「観光農園（いちご）団地」や「花アグリ」などの農業体験施設が整備されたことが大きい。平塚市の南部については、JR平塚駅周辺で行うイベントが増加した要因による要素が大きい。大磯から二宮町にかけての地域の上昇は、港やオープンガーデンなどを活用したイベント等の増加によるものであった。ただし、これらの地域のポテンシャル上昇は、本厚木駅北部地域を除き、既存観光集中地が従来持っている観光デスティネーションとしてのポテンシャルを定量的に上回って、新たにピークを形成するまでには至っていないという判断に本調査は至った。

一方、厚木飯山観音地域や大山阿夫利神社地域等の多くの地域においては、既存施設の衰退によって、15年間での観光ポテンシャルの低下が示されていることも明らかとなった。

また、平塚ゆるぎ地区に関するデータ分析の結果を考察すると、都市型イベントや農業体験施設によってポテンシャルが上昇している平塚市東部や、港やオープンガーデンなどを活用した大磯・二宮地域に近接するものの、ゆるぎ地区自体でポテンシャルの上昇や低下が起きてはいないという実態が明らかになった。

最後に、過去15年間の観光ポテンシャルの質的变化を示すため、図8の差分の値を絶対値化して示したものが図9である。つまり、差分の絶対値を比較して、絶対値が高ければ大きな質

的变化が起こっているし、ゼロに近ければ質的变化が少ないということが、図9からは読み取れる。

図9を見ると、平塚市ゆるぎ地区の西側（中井町を中心とした地域）に広面積の質的無変化地域が広がっていることが見て取れる。そして、平塚市ゆるぎ地区は、この中井地区というポテンシャルの不動地域と、平塚市東部というプラスの方向にポテンシャルが変動している地域の境界付近に位置していることがわかる。つまり、平塚市ゆるぎ地区の観光ポテンシャルをリーズナブルに向上させていくには、ゆるぎの里山の活用とも親和性が高いと考えられる平塚市の北・中央部の農業体験施設などと連携をとりながら観光ポテンシャルを向上させる方向性のもと、広域的観点からは現状では観光整備に無関心な西側の中井町などとの観光連携を図っていくと、観光デスティネーションの体系化が円滑に図れるものと考えられた。

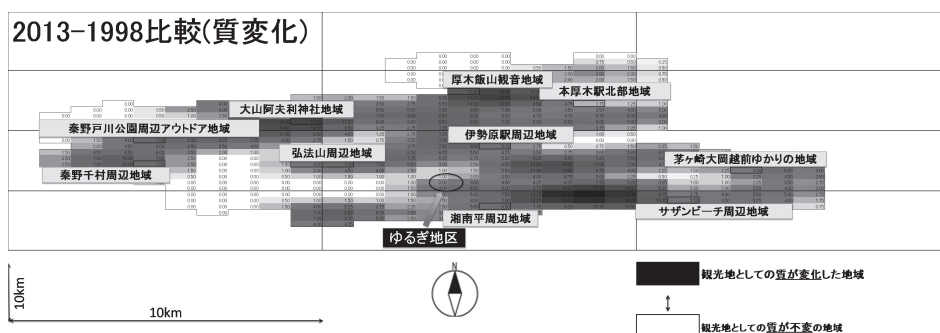


図9 1998年から2013年にかけての15年間の観光ポテンシャルの質的变化
 (「全国観るなび」「全国観光情報データベース」をもとに筆者らが解析)

4. 結論および今後の展開

以上、観光ガイドブックを用いたデスティネーション性の分析、神奈川県内の観光のシーズナリティに関する分析、「三次メッシュを用いた5×5フィルタリング解析法」を用いた分析という3種類の分析を通じて、平塚市ゆるぎ地区を取り巻く観光の現状を明らかにすることができた。

そして、神奈川県はブランドイメージが高く、県内に多様な観光デスティネーションを抱えているものの、県としては統一的なデスティネーションイメージが無いこと、より詳細にいうと神奈川県内のデスティネーションイメージは、「横浜・横須賀地域」、「丹沢・大山地域」、「箱根地域」に大別されてしまっていることを明らかにすることができた。そして、本調査で対象としている平塚市ゆるぎ地区は、その3つの地域の狭間に位置することを示すことができた。

さらに、市町村の観光に関するシーズナリティにおいても、神奈川県は分散傾向にあるため、統一イメージをとることは難しかった。そしてゆるぎ地区のある平塚市においては7月に最も多くの観光客が訪れるという結果が出たが、それはゆるぎ地区からは地理的に離れた「湘南ひらつか七夕祭り」の影響を大きく受けていることが指摘できた。

最後に平塚市および隣接市町（計9市町）を対象にしたフィルタリング解析では、対象区域内に、1998年も2013年もそれぞれ9箇所のポテンシャルが集中したピークが観測されたものの、15年間の間にその内容は変化していることが確認された。対象地の平塚市ゆるぎ地区について考察すると、平塚市ゆるぎ地区よりも東方の地域にいては、観光ポテンシャルがこの15年間で向上したという判断ができた一方で、西側（中井町を中心とした地域）には広面積の質的無変化地域が広がっていることが見て取れた。このことから、平塚市ゆるぎ地区の観光ポテンシャルをリーズナブルに向上させていくには、ゆるぎの里山の活用とも親和性が高いと考えられる平塚市の北・中央部の農業体験施設などと連携をとりながら観光ポテンシャルを向上させる方向性のもと、広域的観点からは西側の中井町などとの観光振興の連携も図っていくと、観光デスティネーションの体系化が円滑に図れるものと考えられた。

以上の結論を鑑みて、現在「地（知）の拠点整備事業（To-Collabo プロジェクト）」などを活用して、平塚市ゆるぎ地区において、いくつかの対策が既に進められている。

まずは、ゆるぎの里山周辺における「観光資源」の発掘（ゆるぎ地区の良いところ探し）をKJ法を用いてマップ化する作業を進めたところ、域内には必ずしも多くの人を呼び寄せる資源が十分に無いかもしれないが、それらの資源に加えて、富士山・大山・江ノ島・スカイツリーなどの眺望がすべて楽しめることが明らかとなった。そのため、眺望資源に注目し、美しい里山を歩きながら景観を楽しむ散策路が活用可能であると判断し、ゆるぎ地ブランド化について検討し、コストがかからない方法として、吉沢八景選定プロジェクトを推進することになった^[20]。

また、産官学民の学の立場から、里山活動で印象に残る場面を分析、エビデンス化する調査も推進した。具体的には、写真投影法を用い、ゆるぎ地区で里山散策や農的活動を行った参加者から提供された「ゆるぎの良い風景」に関する写真を分析することで、来訪者の風景選好を明らかにし、それを次年度選定された「吉沢八景」へのエビデンスデータに活用している^[21]。

さらに、社会科学的観点から、住民が里山活動に期待する内容を分析し、エビデンス化する社会学的フィールドワークを進めている。地域住民へのインタビュー調査を行い、世代間や新旧住民間の交流の実態構造などを明らかにした上で、観光を取り入れた農村コミュニティの存続条件を提示することを想定している^{[22]～[24]}。

以上、里山を活用した観光まちづくりには十年単位の時間を要するため、里山観光まちづくりが完成するためにはまだ多くの時間を有することになると考えられるが、着実にこのような研究成果を積み上げることで、平塚市ゆるぎ地区のケーススタディに限らず、日本全国で、今後大きな課題となる里山管理に対して、ある程度の管理方法の提示が進められると考えている。

謝辞

なお、本研究は、東海大学の「To-Collabo プログラム（『地（知）の拠点整備事業』採択事業（平成23～25年度分）」の一環として行った。

補注

- 1) 例えば、平塚市では、「2核1地域」という将来都市構想を掲げている。2核とは、現在のJR平塚駅周辺（市南部）およびJR新幹線新駅予定地周辺（市北東部）を都市の核心地として整備する一方で、市の北西部地域を農地や雑木林などを活用した里山地域として整備する構想である。
- 2) 「産官学民」の4者協定は、産：日本土地建物株式会社、官：平塚市、学：東京農業大学、民：吉沢地区自治会連合会の間で結ばれた。現在、その4者に学：東海大学／神奈川県立平塚農業高等学校、産：株式会社オオバ（コンサルタント）が加わり、上記団体の連携で「湘南ひらつか・ゆるぎ地区活性化に向けた協議会」が運営されている。この取り組みは、平塚市まちづくり条例による「地区まちづくり協議会」認定第1号となっている。ちなみに、現在の日本では、まちづくりのための2者協定や3者協定までは見ることができるが、「産官学民」の4者全てを巻き込んで、正式に協定書に調印してまちづくりを進めている事例は非常に希である。
- 3) 平塚市に隣接するのは、大磯町、二宮町、中井町、秦野市、伊勢原市、厚木市、寒川町、茅ヶ崎市の8市町である。
- 4) 国内旅行を取り扱った『るるぶ』誌は、テーマ別に最新情報を集めた「るるぶ情報版 目的シリーズ」や、ドライブ旅行に特化した情報をまとめた「るるぶ情報版 ドライブシリーズ」なども刊行されているが、本論では、全国各地の「見る」「食べる」「遊ぶ」を徹底的にガイドしたエリアマガジンとして刊行されている地域別情報誌「るるぶ情報版 国内シリーズ」を解析対象に用いている。
- 5) 例えば、2016年10月に公表された「地域ブランド調査2016 都道府県ランキング（ブランド総合研究所）」の結果では、神奈川県は、北海道、京都府、東京都、沖縄県に続く第5位のブランドイメージを誇っている。
参考 URL: http://tiiki.jp/news/wp-content/uploads/2016/10/2016_pref_ranking1.pdf
- 6) 10誌とは『るるぶ横浜』、『るるぶ横浜線』、『るるぶ東京・横浜』、『るるぶ横浜・鎌倉』、『るるぶ鎌倉』、『るるぶ横須賀』、『るるぶ厚木・伊勢原・秦野』、『るるぶ箱根』、『るるぶ箱根・熱海』、『るるぶ伊豆・箱根』である。
- 7) 当時の名称は「全国観光情報データベース」。

引用文献

- [1] Nobuhiko Tanaka, Megumi Aso Kazuya, Kurita, Hiroaki, Oda, Mitsuo Koizumi, Kazuya Shibata and Takashi Onoma (2013) Collaborative Satoyama area management involving four sectors under a letter of agreement at the peripheral area of Tanzawa Oyama Quasi-National Park, Hiratsuka City, Kanagawa Prefecture, Japan, 1st Asia Parks Congress -Japan 2013 Parks Connect, p241
- [2] 田中伸彦（1999）森林観光レクリエーションに関わる資源・施設の地域ポテンシャル算出に関する考察―笠間地域を対象としたケーススタディー―，レジャー・レクリエーション研究41：102-105
- [3] 田中伸彦（2000）流域レベルの森林観光・レクリエーションポテンシャルの算定，ランドスケープ研究 63(5)，607-612
- [4] Nobuhiko Tanaka and Takashi Watanabe (2001) Forest Management around Lake Kasumigaura that Harmonizes Human Activities with Forests, International Conference on the Conservation and Management of Lakes -Conference Proceedings 9(2), 73-76
- [5] 田中伸彦・渡辺貴史（2001）中山間市町村における観光レクリエーション資源・施設のための森林整備の方向性―八溝多賀森林計画区内の森林管理者に対するアンケート調査―，日本観光研究学会論文集16，193-196

- [6] 田中伸彦・渡辺貴史 (2002) 中山間流域における森林管理上重要な観光レクリエーション地域の構造, ランドスケープ研究65(5), 615-620
- [7] 田中伸彦・渡辺貴史 (2002) 平地流域で観光レクリエーションの観点から森林管理が重要な場所の地形構造および土地利用構造, 日本林学会誌84(4), 280-283
- [8] 田中伸彦・渡辺貴史 (2003) 野外教育に関わる森林管理の動向および計画的森林配置手法に関する考察, 野外教育研究6(2), 11-21
- [9] 田中伸彦・渡辺貴史 (2004) 観光レクリエーションポテンシャルの地域間比較, 日本林学会関東支部大会発表論文集55, 73-76
- [10] 田中伸彦 (2011) 最上川流域のグリーンツーリズムの発展方向, 森林総合研究所交付金プロジェクト研究成果集31, 117-130
- [11] Nobuhiko Tanaka and Hironori Okuda (2012) Can Green Tourism Create New Destinations in Satoyama Rural Areas?—A Case Study of a Geographical Analysis in Mogami Area, Yamagata Prefecture, Japan—, Rimini World Leisure Congress Book of Abstracts
- [12] 田中伸彦 (2012) 里山がもつデスティネーションとしての特性に関する考察, 日本観光学会第102回全国大会研究発表要旨集, 28-29
- [13] 田中伸彦 (2013) 観光レクリエーションに利用されるデスティネーションの地理的集散状況の経年変化を定量的にモニタリングする手法の検討, レジャー・レクリエーション研究72, 68-69
- [14] Nobuhiko Tanaka and Takashi Yamada (2014) Geographical Evaluation of Rural Tourism Management: Analyzing the Distribution of Tourist Attractions and Accommodations, World Leisure Congress 2014; Book of Abstracts, 90
- [15] 田中伸彦 (2014) 公刊図書の出版動向からみた里山に対する関心や嗜好の分析, 日本森林学会誌96, 155-167
- [16] Nobuhiko Tanaka (2015) Providing Regional Information for Collaborative Governance—Case Study Regarding Green Tourism at Kaneyama-machi, Yamagata Prefecture, “Motomu Tanaka and Makoto Inoue Editors, Collaborative Governance of Forests: Towards Sustainable Forest Resource Utilization, University of Tokyo Press”, 249-272
- [17] るるぶ.com HP <https://www.rurubu.com/> 2015年11月1日閲覧
- [18] 平成25年神奈川県入込観光客調査 <http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f80022/p839616.html> 2015年11月10日閲覧
- [19] 全国観るなび <http://www.nihon-kankou.or.jp/> 2015年10月1日閲覧
- [20] 小島周作・服部勉・田中伸彦・町田怜子・麻生恵 (2017) 吉沢八景選定プロジェクトからみる都市近郊の里地里山地域における子ども達の景観認識, ランドスケープ研究80(5), 575-578
- [21] 岡山奈央・田中伸彦・松本亮三・本田量久 (2017) 里山環境が体験作業などを伴う来訪者に提供できる好ましい景観体験の解明, 日本森林学会誌99, 207-214
- [22] 本田量久 (2016) 農村コミュニティの持続可能な発展とその条件—平塚市北西部の農村地域を事例として—, 関東社会学会 第64回大会
- [23] Kazuhisa Honda (2016) The Renaissance of Creative Rural Communities, the 89th Annual Conference of Japan Sociological Society
- [24] 本田量久 (2017) インバウンド観光と地方再生—地域資源の〈再発見〉と地域活性化—, 都市問題108(1), 10-14